「男、突っ走る！」

第17回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内	雅也	（17）	中央高校2年2組生徒
濱口	寧々	（17）	中央高校2年2組生徒
志田	悠喜	（17）	中央高校2年2組生徒
中岡	壮吾	（17）	中央高校2年2組生徒
杉山	優菜	（17）	中央高校2年2組生徒
宮田	春奈	（17）	中央高校2年5組生徒
鬼頭	美彩	（17）	中央高校2年6組生徒
五十川	孝之	（17）	中央高校2年6組生徒
藤野	真弓	（17）	中央高校2年6組生徒
西澤	隆雄	（53）	中央高校2年2組担任

1　中央高校・全景

2　同・ＳＲ２教室

雅也、壮吾、悠喜が話している。

悠喜「おっちゃんがいないと、こんなにも寂しくなるなんて……」

壮吾「そうだな……」

雅也、ぼんやりと空席となっている賢哉の座席を見つめる。

壮吾「うっちー、大丈夫？」

雅也「え？　まあ……何とかね」

悠喜「最初からおっちゃんと仲良かったもんなぁ」

雅也「そりゃそうだよ。当然、一緒に進級して、一緒に卒業するものだと思うじゃん。まさか、こんな形でいなくなるなんてさ……」

悠喜「元気出しなよ。二度と会えないわけじゃないんだし」

雅也「それはまあ、そうかもしれないけどさ

……」

壮吾「おっちゃんがいなくなったら、誰が盛り上げ要員になるの？」

雅也「そんなもん、志田に決まってんじゃん」

悠喜「え、俺？」

壮吾「やっぱりそうだよね」

悠喜「何でだよ」

雅也「かどけんの後任は、志田しかいない」

悠喜「マジか……頑張りますか」

笑って返す壮吾――雅也も微笑んでいる。

3　同・コンピュータ室

雅也、孝之、美彩、春奈がパソコンで作業をしている――雅也の手は止まっている。

N「かどけんがいなくなった後、何とか僕は凹まないように意識していました。しかし、ふとかどけんのことを考えると、集中できない日々が続いていました」

孝之「木内君」
雅也「？　どうした？」
孝之「大丈夫ですか？」
雅也「何が？」
孝之「元気ないみたいだけど」
雅也「あ……ごめん。極力元気でいようと思うんだけど、どうもかどけんのこと考えちゃって」
孝之「突然でしたからねぇ」
美彩「私、あんまりあの子とは話す機会なかったけど、パンテーンはよく一緒にいたもんね。志田もそうやって言ってたし」
春奈「仲が良い子がいなくなっちゃったんだもの、落ち込むのも無理ないでしょ。特にパンテーンは、友達思いだもんね」
雅也「違う中学校で、最初にできた友達だったからね。向こうから声かけてきてくれて……今でもその時のことはよく覚えてる。これまで一緒に遊んできた友達とはタイプが違ったから、入学式の時は絶対に友達に

なんてなるわけがないって思ってたの。でもそれが、思いがけず友達になれて。これまでとは違いキャラの友達だったから、かどけんと一緒に過ごした時間は本当に新鮮だったの」

孝之「僕も、最初にかどけんから木内君を紹介された時、かどけんがこんな大人しそうな子と友達になってたんだって驚いたもん」

雅也「それは俺も一緒だよ。かどけんから五十川君を紹介された時、五十川君のような大人びた子とも接点があるんだってびっくりしたもん。ギャップというか、今思えばかどけんは交流関係が広かったんじゃないかな」

孝之「それは言えてるかもしれませんね」

美彩「二人は、学校辞めないでよ」

孝之「辞めませんよ」

雅也「辞めるわけがないでしょ」

美彩「私たちだって、一緒に卒業したいの。三年間、この部活で一緒に頑張ってきたっ

て、最後は笑って卒業したいじゃない」

春奈「そうだよね。私たちだって、みんなクラスは違うけど、こうして部活の中で一緒に検定勉強し合ってる同士だもんね。（と参考書を見ながら）こんなに勉強しても、結局検定過ぎたらすぐ知識忘れちゃうかもしれないけど」

雅也「検定なんてそんなもんだよ。定期テストと一緒。範囲を勉強して、それが終わったらもうその範囲を見返すことなんてないんだもん。まあ、中には見返して思い出さなきゃいけない知識だってあるかもしれないけど、そういうものはやっていくうちに頭の中に入っていくんじゃないかな」

春奈「まあ、私は正直、期末テストと模試のことで頭がいっぱいだから、今回の検定は諦めてるけどね」

雅也「本当に尊敬するわ。二組は模試がないから、全然呑気なものだよ。それに普段の授業だって、進学クラスじゃ当然レベル違

うだろうし……五組六組の人には、お手上げだ」

美彩「パンテーンだって、今脚本書いてるんじゃないの？」

雅也「ああ……そういえば、最近かどけんのこととか、検定勉強のこともあって、書いてなかったわ」

美彩「でも、新作書くって言ってなかった？」

雅也「言った……。タイトルも決めて、構想も考えてる。でも、まだ原稿用紙としては一枚も書けてないの」

春奈「じゃあ、ちゃんと書かなきゃ。脚本執筆のことだけを考えてたら、辛いことも忘れられるんじゃない？」

雅也「うーん……」

4　同・駐輪場

雅也が自転車の鍵を開けている――と、優菜がやってくる。

優菜「ママ」

雅也「ああ、優菜か」
優菜「今帰り？」
雅也「うん。そっちも、部活終わり？」
優菜「そうだよ」
雅也「ねえ、優菜」
優菜「何？」
雅也「クラスの女子たちは、かどけんのこと恨んでるよね……」
優菜「……まあ、ママには悪いけど、かどけんがいなくなってホッとしてる子はいるだろうね」
雅也「……そりゃそうか。あんなことがあったんだもんね」
優菜「かどけんが悪いのは、正直自業自得だって思ってる。でもだからと言って、それでママがずっと凹んでる顔は、私は見たくない」
雅也「……」
優菜「ママが、かどけんと仲が良かったことはクラスの女子はおろか、全員が知ってる

ことだよ。だから、かどけんが退学したことで、ママやその周辺の人のテンションが下がってることだって、クラスの雰囲気を見てりゃ分かる。でも、それでいつまでも暗い雰囲気でいてほしくないの。本来のママは、もっと明るくて元気な人でしょ？そりゃ、逆にかどけんを追い詰めたと思って女子たちのことを恨んでるかもしれないけど」

雅也「それは違う。俺、女子たちのこと恨んだ覚えは一度もない。かどけんがいなくて寂しいのは本当だけど、かどけんのやったことを援護するつもりはないから。何であんなことしたんだって、最初に事実を知ったときは呆れたもん」

優菜「……」

雅也「許されないことをしたことに変わりはない。それで女子たちがかどけんのことを恨もうが何て思おうが勝手だよ。今言ったように、かどけんの行いを援護するつもり

はない。けど俺にとっては大事な友達だってことは覚えておいてほしい」
優菜「……分かってるよ」
雅也「……」
優菜「一番辛い立場にいるのは、ママだよね私たちクラスの女子とも交流がある中で、大事な友達だから庇いたい、けどその行動は援護できない……。板挟み状態だもんね」
雅也「いや……そんなこと。勝手に誹謗中傷された女子たちのほうが、よっぽど辛いんじゃないかな。俺なんて、仲が良い友達だからっていう私情を挟んでるだけだもん。きっとこれが、全然接点のない子だったら、こんなにも考え込まないはずだもん」
優菜「だよね。けど、安心して。私は、ママの立場を理解してるつもりだから」
雅也「優菜……」
優菜「（笑って）新作脚本、私楽しみにしてるからね。前にブログで、新作書くって宣言してたじゃない」

雅也「ああ……」

優菜「そんなしょげてる顔、ママらしくないよ。もっと生き生きと、創作意欲バンバンにして、目をキラキラ輝かせて原稿書かないと。それがママなんだから」

雅也「……」

優菜「じゃあね、また明日」

と、自転車に乗って去っていく――見送る雅也。

5　木内家・全景（夜）

6　同・雅也の部屋

机上に置いてある原稿用紙を見つめる雅也――表紙に『木漏れ日さす木』と書いてある。

7　同場所（回想）

雅也がパソコンで優菜のブログを見ている。

優菜の声「こんばんは。ゆないてっとです。今日、めっちゃ良い写真が撮れました。ほら、この木漏れ日さす木、キレイでしょ。思わず携帯電話のカメラを起動してました」

優菜の投稿した木漏れ日さす木の写真を見る雅也。

雅也「（つぶやいて）これだ……」

8　同場所（回想戻り）

雅也「（原稿用紙を見て）……」

何かを思いついたように、原稿用紙を広げる雅也――シャーペンを握り、原稿を書き始める。

N「優菜がブログにアップしていた木漏れ日のさしている木の写真からインスピレーションを受けた僕は、この時何かにとりつかれたように新作脚本の執筆を始めました。この日から、学校から帰宅し、宿題をやり、晩御飯を食べた後の数時間、僕はひたすらに原稿用紙と向き合っていました。体育の

授業とはまた違う、何とも言えない体力の消費を感じながらも、僕は一つの作品を仕上げるために、二百字詰めの原稿用紙のマス目に、毎日毎日文字を書き連ねていきました。不思議なことに、原稿用紙に向き合っている間は、学校のことも、部活のことも、検定のことも、そしてかどけんのことも、何もかも忘れてしまうほど、別世界に入り込んだような感覚になっていたのです。そんな毎日を過ごしていくうち、やがて二週間が経ち、僕は原稿用紙百二十枚に至るまで書き続けていました。これは、一時間ドラマ一本分の尺になります。気づかないうちに、僕の右手中指には小さなペンだこができていました」

9　中央高校・全景（朝・二週間後）

10　同・ＳＲ２教室

雅也が登校してくる。

雅也「おはよう」

雅也、優菜と寧々の席へ行くと、鞄から大きな封筒を取り出す。

雅也「新作脚本、書けた」

寧々「お！　お疲れ様。頑張ったじゃん。

（と封筒から原稿を取り出すと）すごい枚数」

雅也「百二十枚。それで、大体一時間ドラマ一本分」

寧々「へえ。テレビ見てると、普通に一時間ドラマってあっという間に終わっちゃうけど、あれを原稿用紙にするとこんなにも厚いんだ」

優菜「（原稿を見て）この木漏れ日さす木って、どういう話なの？」

雅也「まあ簡単に言うと、ちょっと恋愛要素が入った学園青春ものかな」

寧々「あれ珍しいじゃん。ホームドラマとか時代劇が好きなママがそんなジャンル書くなんて」

雅也「俺も、まさか自分がそんなジャンル書こうなんて思ってもみなかったよ。けど、新しいジャンルに挑戦したいっていう想いもあったしね」

寧々「何か元ネタとかあるの？」

雅也「元ネタっていうか、タイトルはヒントになったものならあるけど」

寧々「何？」

雅也「優菜のブログ」

優菜「え、私の？」

雅也「前にさ、木漏れ日のさしてる綺麗な木の写真が撮れたって、ブログにアップしてただろ」

優菜「ああ。（と思い出したように携帯電話を取り出して写真を見せて）これ？」

雅也「そうそう。あのブログを見たとき、これだっと思ったんだよ。何か降ってきたんだよね。そうしたら、いつの間にか自分の中で高校生の恋愛青春ものっていうジャンルになって、こんなに書いちゃった」

優菜「（物珍しそうに原稿を見て）私がアップしたあの木の写真一枚で、ここまで膨らませるなんて、ママの頭の中、一体どうなってるの？」

雅也「（頭を指しながら）えっと、こっちが左脳で、こっちが右脳で……」

優菜「そんなこと聞いてるんじゃないの」

雅也「どうなってるって言うから」

優菜「（笑って）やっぱりママは、それぐらいのキャラじゃないと。これだけの創作意欲があるんだもの、これからも頑張ってよ」

雅也「うん。俺の新作脚本を待ってくれてる人がいる限り、俺は書き続けるよ。とにかくいろんな情報をインプットして、俺にしか書けない木内ワールドを作ってみせるわ」

寧々「そうよ。ママ独特の世界観があるのが良いんだよ。他の人には書けない、ママだからこそ書ける脚本って絶対あると思うもん。好きなジャンルがあるのは良いけど、結局それと同じようなものを書くと二番煎

じだって言われて大成しないでしょ。それだったら最初から、木内ワールドっていうのをちゃんと確立させて、ママの個性を出せば良いんだよ。ただでさえママなんて個性の塊みたいなものなんだから」

雅也「それ、どういう意味？」

寧々「ん？　そのままの意味」

雅也「ほぉ。じゃあ、前向きな意見として聞いとくわ」

寧々「そうしてください」

優菜「（雅也に）これ、読んで良い？」

雅也「もちろん。しばらく貸すから、また感想聞かせて」

優菜「やったー！　ママの新作脚本、私が最初に読める」

と、嬉しそうに原稿用紙をめくっていく――その様子を見て笑っている雅也と寧々。

11　同・廊下

雅也が歩いている――西澤とすれ違う。
雅也「（笑顔で）おはようございます」
西澤「おはよう、木内。どうした、随分機嫌が良いじゃないか」
雅也「そうですか？」
西澤「何か良いことでもあったか？」
雅也「別にいつも通りですよ」
西澤「そうか。最近門脇がいなくなってから元気がなかったように見えてから」
雅也「まあ、それは確かにあったかもしれません。でも、もう凹むのはやめました。学校も創作活動も、全力で楽しみたいと思います」
と、笑顔で軽く会釈をすると、また歩いていく――微笑んで見送る西澤。

12　同・中庭

自販機で缶ジュースを買う雅也――その缶ジュースを飲み干す雅也。と、真弓が通りかかる。

真弓「おはよう、ツリーイン」
雅也、声を聴いて振り返ると、
雅也「おはよう、真弓さん。てか、そのツリーインっていうのやめてくれん？」
真弓「どうして？　ブログの名前、それでやってるじゃん。ニックネームなんじゃないの？」
雅也「まあ、そうなんだけどさ」
真弓「案外元気そうで安心した。門野君がいなくなってから、元気ないんじゃないかなって心配してたんだよ」
雅也「それはわざわざご丁寧に。かどけんと接点合ったんだ」
真弓「まあ、帰る方向が同じだしね。それに、ＳＮＳで繋がってると、何となくどちらからともなく話すようになるし」
雅也「やっぱり、そういうもんだよね」
真弓「ツリーインっていう名前、門野君がつけてくれたんでしょ？」
雅也「うん」

真弓「じゃあ、大切に使わないと。それに、語感も良いから呼びやすいじゃん。学校内でどんどん広めていこうよ」
雅也「（笑って）良いよ、そこまでしなくても」
真弓「脚本の方は、順調？」
雅也「うん。昨日、新作一本書き終えた」
真弓「すごいじゃん。私、ツリーインのファンになろうかな」
雅也「ぜひなってくださいな」
真弓「じゃあ、有名になる前にサインももらっとこうかな」
雅也「有名になるなんて、そんないつの話になるやら」
真弓「前に話したこと、覚えてる。ツリーインのドラマに関わりたいって話」
雅也「もちろん」
真弓「その時が来るまで、私は準備しとくから」
雅也「ありがとう」

真弓「じゃあね。今日も一日頑張ろう」
雅也「頑張りましょう！」
笑いながらそれぞれの教室へ向かっていく。

13　同・廊下
雅也が歩いている。
N「創作活動と、僕の作品を待ってくれている人たちのおかげで、僕は立ち直れました。執筆活動を行っているうちに、あっという間に世間では年の瀬を迎えようとしていました」

つづく